近況報告

黒木俊弘

大学後の進路はほとんど何も考えなく、もう少し歴史を勉強したいという想いだけで大学院に進学した。それも、卒業論文の作成に当たり、はじめて自分は大学で何も勉強していないことに気付き、当時交流のあった院生の勧めで大学院で研究することに決めたのである。古フランス語の史料読解に悪戦苦闘しながらも、何とか大学院を三年かかって修了した私は研究を進めたいと思うようになり、熊本大学大学院の博士課程に進学することになった。熊本大学では五年間在籍し、博士論文を未熟な内容ながらも完成させることができた。今振り返ると、この大学院時代は、多くの素晴らしい先生方との出会いがあり、また常にマンツーマンで丁寧な指導を受けることができ、無心で学問に打ち込めた本当に幸せな時間であったと言える。

漠然と考えていた研究者への道も、多くのプロフェッショナルと交わる中で、博士課程を終える頃にはすっかり諦めに変わり、たまたま大学で募集のあった事務職員として勤めることになった。主に社会人院生のフォローや予算の管理の他、大学院主催のシンポジウムの準備・運営などの仕事に携わる中で、ようやく社会人としての自覚が備わり将来に向けて真剣に考えていくようになった。

社会人として次の仕事を考えるきっかけとなったのが、熊本にいた時期にはじめたNPO「NEXTEP（ネクステップ）」への参加であった。（現在は認定NPO法人。http://www.nextep-k.com/）NPOでは主に不登校児サポート事業に携わり、畑で子どもたちと一緒に作物を育てたり、自然体験活動などを通して、不登校の子どもたちが社会に一歩踏み出せる手伝いをしていた。法人化に際しては理事も務め、思い返せば、このネクステップでの活動が、今の仕事（特別支援学校教諭）に直接つながる一番のきっかけであった様に思える。

地元の呉市に戻ってからは、まずハローワークで雇用保険の窓口を半年、残り半年は大学生の就職支援員として勤めた後、公立高校の非常勤を複数掛け持ちした。どこか心の奥の方で、不登校児支援への思いがあり、不登校児を積極的に受け入れる県外の私立高校の採用試験を受けて、二年間本務者として勤めた。ここでは、世界史や地理等の教科指導だけでなく、分掌業務や生徒指導、担任としての学級経営、そして自身が続けていたテニスを部活動で教える等、種々の学校業務を行う中で、教師の仕事の楽しさや難しさ、そして何より生徒と向き合い指導することのやりがいを感じることができた。また、この二年間に結婚し、家族の将来を考えた上で広島に戻ることを決断。県の教員採用試験（特別支援学校高等部）を受けることになる。特別支援学校を受験した理由は、私が接してきた不登校児の中には障害を持つ子どもも多く、自分自身が何の知識もなく実態に応じた支援ができていないことで、特別支援教育の重要性を痛感したからである。そうして広島に戻ってからは、一年間、市内

の特別支援学校で臨時的任用教員として経験を積んだ後、翌年二次試験に合格し、晴れて昨年度から県の教員として広島県福山市で教師をしている。生徒の障害は多種多様であり、それぞれ実態は異なりそのため指導や支援の仕方も異なるが、生徒と接するのは何よりも楽しく、教えることの喜びを感じながら仕事ができている。別府大学大学院の修了式で師の馬場典明教授から頂いた「ARS LONGA VITA BREVIS FESTINA LENTE」の言葉を忘れず、これからも地道に一歩ずつ、急がば回れの精神で教師生活を歩んでいきたい。